“ゆとり君”と働くために覚悟しておくこと(第10回)

「僕はできません。だって新入社員ですから」

2016.02.10

「反省→検証・分析→改善→行動」のサイクルに入る。これが「教えられ上手(あるいは育てられ上手、怒られ上手)」になることです。ゆとり世代をいかにこのサイクルに入れるかが、最後のカギになります。

現在、ゆとり世代で最も問題になっているのが、やる気を失うことです。「入社前に抱いていた仕事のイメージと違うため、失望してやる気を失う」などと一般的には解説されています。しかしもう少し詳しく見ていくと、ビジネス社会で経験した「うまくいかないこと」に対して、指導されたり、怒られたり、小言を言われたりと、ゆとり世代にとって「小さな嫌な経験」をすることで落ち込み、それが積み重なってやる気を失っていくのが分かります。

ここには、先に説明した「他責」「自責」の考え方が大きく関係してきますが、最も基本的なのは「ビジネスではうまくいかないことのほうが多い」のが分かっていないということです。ほめられ続けて育ったゆとり世代は、あまり挫折を知りません。他人と競争して負けるという経験や、“うまくいかない”経験が少ないのです。つまり「うまくいかない」だけで未知の領域であるのに加え、「怒られる・叱られる」という未知の体験がさらに重なり、二重のショックを受けてしまうのです。

加えて、先に述べた通り、態度の横柄な上司と接するのもストレスです。その結果、「上司は自分を目の敵にしている」「上司は何も教えてくれない」と、責任を上司に転嫁してしまいます。もし、そういう態度を取られたら、上司であるあなたも「もうどうでもいいや」という気分になってしまうのではないでしょうか？ ゆとり世代にはまず「ビジネス社会ではうまくいかないほうが多い」ことを理解させます。そして、うまくいかないときに「あきらめないこと、逃げないこと、立ち向かうこと」を教えましょう。

これは、相対評価で育った上司世代には当たり前のことです。学生時代までの経験で、たくさんの「うまくいかないこと」を経験していますから、時には挫折することもあったでしょうが、自然と「あきらめずに立ち向かう」という気持ちも鍛えられています。ところが、ゆとり世代は失敗や挫折の経験が少ないですから、社会人になってから「あきらめずに立ち向かう」ことを教えなければなりません。

失敗してもあきらめず、もう一度考えて行動するーー。こう書いてしまうといかにも当たり前ですが、ゆとり世代はその当たり前のことが難しいと思っています。上司がゆとり世代に期待しているのは「成功する」ではなく、まずは「失敗してもくじけない」であると繰り返し、すり込むことが必要です。

上司が挨拶しないなら、僕もしたくありません… 続きを読む